

『高野聖』と講談

——『湯女の魂』と岩見武勇伝を中心に——

坂井 健

はじめに

- 一、『蝙蝠物語』と『湯女の魂』
- 二、『湯女の魂』と武者修行もの
- 三、『湯女の魂』における岩見武勇伝受容の可能性
- 四、『湯女の魂』と岩見武勇伝
- 五、『蝙蝠物語』と岩見武勇伝
- 六、『白鬼女物語』『飛縁魔物語』と岩見武勇伝
- 七、『高野聖』と岩見武勇伝
- 八、『高野聖』と講談
- 九、『私』の機能
むすび

『蝙蝠物語』は『高野聖』とその原形とされる『白鬼女物語』などとの類似点をもつ作品であるが、『湯女の魂』とも双生児のような関係にある。その『湯女の魂』は、鏡花自作の講談をもとに書かれた作品であり、素材についても、語りのありようについても、講談とのつながりが強く、特に、岩見武勇伝を下敷きにしている。时期的にいつて、『蝙蝠物語』『白鬼女物語』は、『湯女の魂』よりも成立がかなり先であるが、素材については、これらの作品の時期に遡って、岩見武勇伝を中心とした講談の影響を考えることができる。当然、『高野聖』についても、同じことが言えるのであるが、『高野聖』の場合、その影響は、素材にとどまらず、『湯女の魂』と同様に、語りのあり方にも及んでいる。特に、「私」という聞き手が講談調の宗朝の話を書く体裁を取っているところに鏡花の工夫を見ることができる。

はじめに

『高野聖』（明治三十三年）に対する講談の影響については、これまでも指摘がないわけではなかった。¹⁾だが、それは主に語りのありように関するものであって、素材の面については、ほとんど取り上げられていないようである。以前に、『蝙蝠物語』（明治二十九年）と『高野聖』『白鬼物語』などとのつながりを指摘したことがあったが、²⁾『蝙蝠物語』は、『湯女の魂』（明治三十三年）の双生児ともいふべき作品であり、その『湯女の魂』が紅葉宅における新作講談会での鏡花による口演の速記に基づく作品であつてみれば、その素材についても、『高野聖』と講談の關係は充分に考えてよいはずだ。

本稿では、『湯女の魂』における講談の摂取を確認し、特に岩見武勇伝との関わりを中心に考察する。ついで、『蝙蝠物語』『白鬼物語』『飛縁魔物語』との關係に及び、最後に、語りの問題も含めて、『高野聖』における講談の影響の意義を論じたい。

一、『蝙蝠物語』と『湯女の魂』

『蝙蝠物語』『湯女の魂』も、山深い温泉場で働く女の悲恋と妖怪譚を描いた作品である。

「白谷」の温泉宿の養女である雪野は、語り手「予」の友人時之助と相思相愛なのだが、育ててもらった恩ゆえに、宿の息子である「骨なし」に妻として仕えている。ある時、「予」と時之助が温泉場を訪ねると、雪野は神隠しにあつてた。恐らくは、谷を流れる「笹川」の奥に棲む魔神に取られたに違いない。その晩、時之助は悪夢にうなされ、大蝙蝠が現れると、憑かれたように山中に分け入って行く。後を追った「予」は、怪しげな孤家にたどり着く。その中で「予」は怪異に出会い、無気味な女が魔法を使つて、時之助を思い切れと雪野を責めている場に立ち会ふ。

以上が『蝙蝠物語』の大略で、ここで中絶している。

『湯女の魂』になると、「予」に相当するのは小宮山、時之助は篠田、雪野は温泉宿の湯女（養女ではない）お雪で、舞台も富山県の小川温泉となつてゐる。大きく違つてゐるのは、「骨なし」の亭主が存在しないことと、それと関わつて篠田は東京におり、温泉には来ていないことである。これは、おそらく一回物の講談として作られたために、複雑な設定や重苦しい主題を避けたものと思われるが、そのため篠田は格別の事情もないのに、お雪を娶ろうとしないことになり、薄情な男として描かれることになる。お雪も神隠しにあつたりせず、毎晩悪夢にうなされる病にふせてゐるのだが、そこに話を聞いた小宮山が訪れ、二人寝

物語をするうちに、蝙蝠の妖怪が現れ、お雪を山中に誘う。後を追った小宮山が孤家にたどり着くと、無気味な女に招じ入れられ、中にはいつて行くと、怪異に出会い、女の魔術を目の当りにし、お雪が責められている場面に立ち会うというもののだが、『湯女の魂』では、お雪の篠田に対する思いを断切り、恋患いを直すために責めているのであり、そのためお雪の思いを断ち切れぬと知った女から、お雪の魂を篠田に言付けられた小宮山は、お雪の生霊に怯えながら、東京の篠田のもとに帰り着き、魂を届けるとのオチがついている³。

構想についてみると、『蝙蝠物語』の方がかなり複雑であるが、前述のような判断から、発表年代だけではなく、原構想の成立年代についても、『蝙蝠物語』の方がかなり先であるとして見て間違いないまい。つまり、『湯女の魂』は『蝙蝠物語』の原構想の枝葉を切り落とすことで成立しているわけである。

したがって、「骨なし」の亭主等の人物設定の違いを除いた構想は、『蝙蝠物語』の原構想にすでに存在していたに違いない。さて、そのうちの蝙蝠の妖怪と謎の魔女というキャラクターについては、『絵本百物語』にその素材を求めうると考えられるのだが、その他の要素についてはどうであろうか。

魔法を使う場面は、先学の指摘するごとく『金驢譚』⁵などが参考にされているのだろう。だが、男が妖怪に悩まされている美女のいる所に行き合わせるという、どこにでもありそうな話の直接の素材はいったい何なのであろうか。次に、『蝙蝠物語』の原構想にまで遡って考えられる、このどこにでもありそうな話の直接の素材を探って行こうと思う。

二、『湯女の魂』と武者修行もの

『湯女の魂』は、前述したように、分類するなら怪談ものになろうが、一面では武者修行もののパロディになっている。それは、宿の女中に、妖怪に取り憑かれている苦しんでいるお雪を介抱して上げてほしいと頼まれた小宮山の、次のような台詞からも明白である。

「そりや何しろ飛だ事だ、私は武者修行ぢやないのだから、妖怪を退治ると云ふ腕節はないかほりに、幸ひ臆病でないだけは、御用に立って、可いとも！望みなら一晚看病をして上げよう。」

「幸ひ臆病でないだけは、御用に立って」などといっているが、実際には、臆病風に吹かれて何もできない場面が

出てきて、この作品のひとつの面白さを支えている。それとはともかくとして、お雪を蝙蝠にさらわれたときの小宮山の描写も同様である。

小宮山は切齒をなして、我赤檜を割つて八角に削りなし、鉄の輪十六を嵌めたる棒を携へず、彦四郎定宗の刀を帯びず、三池の伝太光世が差添を前半に手挟まらずと雖も、男子だ、然かも江戸ツ児だ、一旦請合つた女をむぎ／＼魔に取られてなるものかと、追駈けざまに足踏みしたのであります。

實際は、請け合つた女をあえなく魔に取られてしまうわけで、情けないことはなほだしい。怪しげな孤家にたどりで着いた時の描写も、大げさなだけに、かえつておかしみがある。

お雪の姿を隠したは、此家の内に相違ないぞ、這奴！小川山の妖怪ござんなれと、右から左へ、左から右へ取つて返して、小宮山は此家の周囲をぐる／＼と廻つて窺ひましたが、敢て要害を見るには当らぬ。何の蝸牛見たやうな住居だ、此の中に踏み込んで、罷り違へば、殻を背負つても逃げられると、高を括つて度

胸が坐つたのでありますから、威勢よく突立つて凜々とした大音声。

「お頼み申す、お頼み申す！お頼み申す！」

以上見てきたように、『湯女の魂』は、武者修行もののパロディ的な要素（あるいは、本歌取りといった方が分かりやすいかも知れないが）を多分に持っているわけだが、それはユーモラスな感じを出すだけではない。もう一つ、大切な働きをしている。それは下敷きとなつている話を見せ札としてちらつかせながら、それをずらして虚実の狭間で新しい話を紡ぎ出す作用である。具体的にいうなら、妖怪退治の武者修行ものをちらつかせながら、逆に、小宮山は妖怪には歯が立たず、妖怪どころか、逆に、お雪の幽霊に取り憑かれる、というオチをつけていることであり、話の作り方としては、聞き手の意表を突いたおもしろい展開を可能にする働きである。むろん、この場合、小宮山とかいう男が小川温泉に行ったあたりまではありそうだが、あとは怪しいわけで、そのだまし合い、だまされ合いが楽しいのである。

三、『湯女の魂』における岩見武勇伝受容の可能性

男が妖怪に悩まされている美女のもとに行き合わせると

いう設定は、どこにでもありそうであるが故に、通常はその素材を特定できないものだが、以上のような考察から、とりあえず『湯女の魂』については、講談の武者修行ものから来ていると考えて良さそうである。しかも、出自をさらに特定する手がかりがないわけでない。それは、お雪の気鬱の原因を篠田への恋患いであることを知った小宮山が次のように思う場面にある。

お雪の病気を復すにも怪しいものを退治るにも、著婆扁鵲に及ばず、宮本武蔵、岩見重太郎にも及ばず、たゞ篠田の心一つであると悟りましたので（中略）何よりも先づ篠田に逢つてと、慥う存じましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

妖怪を退治する著婆扁鵲や宮本武蔵の話がないとも限らないが、著婆、扁鵲といえは美女に化けた金毛九尾の狐の正体を見破る名医であり、武蔵といえは巖流島の決闘を想起するであろう。そして、岩見重太郎といえは化物退治である。そこで、岩見重太郎に絞って考察を進めることにする。

岩見重太郎伝は、周知のように、父と兄を殺された重太郎が、諸国遍歴の後、後藤又兵衛、塙団右衛門の助けを受

けて、天の橋立で三千の敵の中、仇討本懐を遂げるというものだが、その間に様々な武勇談、妖怪退治が盛り込まれたもので、当時広く親しまれたものだった。

ちなみに、国立国会図書館所蔵の岩見武勇伝（以下、特に示さない限り、これらの岩見重太郎に関する話全般を岩見武勇伝と記すことにする）のうち、『高野聖』成立前後の明治二九年から三四年までにかぎって見ても、八人の講談師による八つの口演本が残っており、それぞれ、化物退治の分布状況は次のごとくである。

- ① 『岩見重太郎伝』双龍齋貞鏡講演（明治二九年）
重太郎、青葉山山中での大蛇退治。表紙も。（狸々退治なし）
- ② 『岩見武勇伝』田辺南麟講演（明治三〇年）
重太郎、青葉山山中での大蛇退治。表紙も。（狸々退治なし）
- ③ 『岩見重太郎』西尾東林講演（明治三二年）
重太郎、信州松本での狸々退治。富山で、山猫退治。（大蛇退治なし）
- ④ 『岩見重太郎』新流齋一洗口演（明治三一年）
重太郎、青葉山山中での大蛇退治。信州飯田での狸々退治。

⑤ 『岩見重太郎』揚々舎鶴燕自作日記（明治三二年）

重太郎、仙台近くの「青森山」で大蛇退治。（狸々退治なし）

⑥ 『岩見武勇伝』一流斎文雅口演（明治三三年）

重太郎、青葉山山中での大蛇退治。（狸々退治なし）

⑦ 『岩見武勇伝』桃川燕林講演（明治三四年）

重太郎、富山へ向かう立山の山中で大蛇退治。富山で狸退治。

⑧ 『岩見重太郎』錦城斎貞玉口演（明治三四年）

重太郎、青葉山で大蛇退治。信州飯田での狸々退治。

おおざっぱにいつて、岩見武勇伝での化物退治の話は、

青葉山での大蛇退治、信州での狸々退治、富山での山猫

（狸）退治の話に分けられる。流布状況から見て、先ず始めに大蛇退治があつて、その後、狸々、山猫（狸）退治が

加わつたものと見られるが、明治三〇年以前のものに狸々、山猫（狸）退治の話がないからといって、当時その話が流

布していなかつたとはかぎらない。むしろ、実際の口演の場では、それ以前に流布していたと考えるのが自然だろう。

そこで、本稿では、鏡花は『湯女の魂』ではもちろん、

『蝙蝠物語』執筆の時点で、三つの化物退治を受容できる立場にあつたとの前提で論を進めていきたい。

四、『湯女の魂』と岩見武勇伝

では、その岩見武勇伝の三つの化物退治の話はどのようなという、おおむね次のようなものである。

① 青葉山での大蛇退治

獵師が、大蛇退治を目論むところへ仙台から逃れてきた重太郎が来合わせる。そこに大蛇が登場。獵師、鉄砲で撃つも大蛇に通ぜず。重太郎、大蛇の目を撃つ。大蛇、暴れるも、重太郎に討ち取られる。

② 信州での狸々退治

重太郎、人身御供の娘の噂を聞く。重太郎、娘の身代わりとなる。妖怪現われる。重太郎、切りつける。年を経た狸々の死骸が見つかる。

③ 富山、黒川での狸（山猫）退治

重太郎、旅に病み、旅籠で名医に救われる。そこで、妖怪に取りつかれた娘の噂を聞く。美男が娘の部屋に毎晩通い、妖怪の気配に家人が恐れるという。重太郎、化物退治を申し出る。噂を聞いて駆けつけた家中の若侍と協力して、化物退治成功。

このうち、化物が取り憑くのは③のみだから、蝙蝠の化物が取り憑く『湯女の魂』との比較でいうと、この話が問題になってくる。

次に、両者の類似を場面をあげる。

それは、『湯女の魂』の中で、女中からお雪の気病みの話が出る場面である。

「……其の病氣と申しますが、風邪を引いたの、お肚を痛めたと云ふのではない様子で、まあ、申せば、何か生霊が取憑いたとか、狐が見込んだとか云ふのでございませう。何でも悩み方が変なのでございます。

其の証拠には毎晩同じ時刻に魔されてね。」（中略）

「……其時はもう内曲の者一同、傍へ参ります処ではございませんよ、何だつて貴方、異類異形のが、病人の寝間にむら／＼して居りますやうで……」

毎晩決まった時刻に、何ものか化物が取り憑き、その時は、部屋中に妖氣が立ち込めるというのである。『湯女の魂』では、この化物は蝙蝠の化身たる奇怪な女であった。

次は、『岩見武勇伝』（⑦、桃川燕林講演、明治三四年）

の富山で妖怪について噂を聞く場面。

「……私くしが思ひますには怪物につかれて居るので何うも狐でも付て居るらしく人間の脈じやアないといふことを私くしが書いて出しました……毎晩其の娘の座敷に奇麗ナ男が通ふと云ふので家中の御方不思議に心得まして、夜／＼其の惣右衛門の娘の座敷に詰ました夜の八ツ頃をいになると家鳴震動をいたします実に何うもこれは恐れ入りましたもので私くしも每ばん参りましたがハツといふと恐ろしい音がいたしますので怪物が娘の座敷に参りますものと見えて……」

夜な夜なある時刻になると異変を起こす娘、化物に取り憑かれてゐるらしく、家内は恐ろしい物音に包まれる。一見して類似は明らかであらう。違っているのは、現れるのが女と男、取り憑くのが、蝙蝠と狸くらいのものであるが、これも例の一種のパロディなのであって、聞き手にとって既知のお話を匂わせつつ、虚実の狭間で別の話を紡ぎ出すという手法である。田舎の温泉に狐憑きの女がいたというところまでは、いかにもありさうである。ところが、取り憑いているのは、狐か狸かと思うとはからんや蝙蝠の妖怪があらわれ、その正体は、女に取り憑くのだから男だらうと思うと女、という風に、読者（聞き手）の想像をは

ぐらかしながら、興味をそそって行く。なお、『湯女の魂』の舞台が越中富山であることに、岩見武勇伝に対する意識を見ることができるかもしれない。

ところで、この『岩見武勇伝』の中で脈によって人間ではなくて化物が取り憑いていることを知るとの件があるが、これなどは『三国妖婦伝』あたりを踏まえている。桃川燕林は、脈を診ることで正体を知る、例の普婆扇鵲の話を持ちつかせて、化物の正体を狐のように思わせてながら、今度は蛇婿通いを思わせる美男を登場させ、正体は何だろうと知りたがらせておいて、最後に、実は狸でとのオチをつける、という心憎いまでの話作りを行なっている。

つまり、こうした虚実の狭間で新しい話を紡ぎ出すパロディの手法は、講談で話づくりに盛んに用いられているものなので、鏡花は、『湯女の魂』でそれを活かしているわけである。

五、『蝙蝠物語』と岩見武勇伝

以上のように、講談、就中岩見武勇伝が『湯女の魂』に与えた影響について、素材と話作りの手法との両面から見てきたわけだが、ここでは、『蝙蝠物語』にまで対象を広げて見て行きたいと思う。

さて、『湯女の魂』は、化物退治の岩見武勇伝の一種の

パロディであるのみならず、場面描写さえ取り込んだものであることは今述べた。『蝙蝠物語』と『湯女の魂』とが双生児のごとき作品であることは前述の通りである。となると、『蝙蝠物語』にも、岩見武勇伝の影響があると考えるのが自然である。すなわち、両作品に共通してみられる、男が妖怪に悩まされている美女のもとに行き合わせるとの、『蝙蝠物語』の原構想に遡って考えられる設定は、岩見武勇伝にその源を求められるであろう。

もともと、疑問がないわけでもない。『蝙蝠物語』の梗概で触れたように、雪野は神隠しにあってしまっている。したがって、四節に示したような、女が妖怪に取り憑かれて苦しむ場面は存在しないわけで、読者（聞き手）が、明らかにそれと分かるように引かれている場面はない。したがって、『蝙蝠物語』は、岩見武勇伝のパロディであるとはいいたいことになる。とすれば、男が妖怪に悩まされている美女のもとに行き合わせるといふ素材は別にあつて、『湯女の魂』の時点で、岩見武勇伝が取り込まれたと見ることも可能である。

しかしながら、パロディでないということ、素材として考えられないことは別である。パロディは、半ばあからさまにその素材を読者（聞き手）にちらつかせる。というより、読者に素材を知ってもらった方が、面白さが増

すのである。読者は、「ここはあの話をもってきたな。」
「ここはいくらなんでも作り話だろう」などと思ひながら、
楽しむことになる。

ところが、逆の場合もある。作者が素材を押し隠し、その話にリアリティを与えようとする場合である。その場合、素材が別にあることがわかってしまったら、話そのものの信用度が低くなって、少しも面白くない。『蝙蝠物語』の場合は、この後者に属すると考えられる。

このように考えるのは、『蝙蝠物語』に登場する「白谷」と「笹川」という地名ゆえである。これはどちらも、読者が「ああ、あの温泉か」とか「あの川か」と思うような地名でもなければ、富山の小川温泉という実在の温泉でもない。

ところが、岩見武勇伝で妖怪が出るのは富山の「黒川」なのである。これは『蝙蝠物語』の「白谷」を連想させはしないか。「黒」が「白」に「川」が「谷」に入れ替えられているだけに、その入れ替えの作為性を感じられるのである。妖怪に取り憑かれて魔されるのが、女の雪野ではなく男の時之助であることにも、同様の作為を見て取れよう。しかも、明らかに岩見武勇伝を踏まえている『湯女の魂』の舞台の富山県の小川温泉の近くには、「笹川」という川が流れているのだ。すなわち、『蝙蝠物語』の時点で、岩

見武勇伝で妖怪が現れる越中富山という土地が踏まえられていたのである。しかも、踏まえられつつも、『湯女の魂』とは逆に、素材は注意深く隠蔽されていた。

六、『白鬼女物語』『飛縁魔物語』と岩見武勇伝

前節では岩見武勇伝と『蝙蝠物語』の関係について見たから、ここでは、『白鬼女物語』（成立年代不明、推定明治二六～八年）『飛縁魔物語』（成立年代不明、推定明治二～三年）との関係について考えたい。

『蝙蝠物語』が岩見武勇伝を素材にしているのであれば、『蝙蝠物語』の原構想に遡って考えられる、男が妖怪に悩まされている美女のもとに行き合わせるという設定も、岩見武勇伝を下敷きに行っていることになるが、これは『蝙蝠物語』の語り手である「予」の性格を説明するのに都合が良い。というのは、『蝙蝠物語』で登場する魔女が、「予」に「御身は、友人の難を救ふを托つけに其実物見高にして、少々恐きものも見たきならずや。」という場面があるが、これが「予」の本心を突いた台詞だとすれば、「予」は、恐いものの出現を喜ぶ、武者修行ものの主人公に近い性格を持った人物であるといえるからである。

こうした性格は、『蝙蝠物語』と類似した先行作品で、しかも『高野聖』の原形とされる『白鬼女物語』の主人公

においてさらに著しい。「春日峠」の茶店の翁に、山中には恐ろしい魔法使いがいるから、旧道は通るなどの注意を受けた「予」が、逆に、「奇怪はすべて少年が血気に投ずるものなれば我を忘れて聞惚れつ。これは一段と愉快しいかなる手並を有するにせよたかゞ一個の婦人なり」と思う箇所、山中で何ものかの気配を感じ、「傾く耳に聴き済ませば馬か、牛か、はた鹿か、何様大なる四足のものゝ徐かに近寄る氣勢になむ、そりやこそ序幕が開けるは、と心密かに打笑まれて」という場面などは、その典型である。これまで『白鬼女物語』の「予」の恐いもの見たさは、『金驢譚』の「予」との類似に求められてきたが、以上から明らかのように、武者修行もの、特に岩見武勇伝との関係をも考えるべきである。

こうした関係は、さらに『白鬼女物語』の原形とされる『飛縁魔物語』についても考えることができる。『飛縁魔物語』冒頭の「ふと思立ちて諸国一見に出しより」というくだりは、諸国修業の武者を思わせるし、夜の山中に現れた不思議な白馬を主人公が追って行く時の「旅客は深夜の歩行に馴れて胆太き漢なれば」という説明は、豪傑肌の主人公を想像させる。さらに、深山にあるはずもない馬小屋に独り入り行く白馬の挙動を怪しんだ主人公の「彼の畜生の挙動の怪しきは理こそあらめ覗きて見む」という心内語

にも、妖怪退治に勇む豪傑の心理の痕跡を認めることができるだろう。『飛縁魔物語』は、断片というべきもので、岩見武勇伝と特定する材料がないので、とりあえず、武者修行ものの影響だけをいっておきたい。）

以上は、主人公の性格についてである。さて、『飛縁魔物語』のその後の展開は分らないが、『白鬼女物語』については、かなりの分量が残っているので、主人公の性格だけではなく、物語の展開自体にも岩見武勇伝の影響を見て取れる。

『白鬼女物語』は、美少年の「予」が茶屋の翁の忠告を無視して、好色な魔法使いの棲む深夜の春日峠の山中に分け入り、そこで何物かに取り憑かれたように走る馬を目にして後を追ひ、馬に魔法をかける裸体の女をかいま見、見とがめられて逃げる途中、白い大蛇の幻を目にし、山中の奇怪な家に迷い込み、そこで怪異に出会うというもので、中絶しているが、女が馬に魔法をかける場面が『高野聖』の名高い場面と酷似していること、大蛇の出現と対応していることから、『高野聖』の原形とされる草稿である。

この『白鬼女物語』の素材が『曾呂利物語』の「越前の国白鬼女川由来の事」に代表される地名由来譚にあることは、以前に指摘した。⁽⁶⁾

それは、越前平泉寺の美僧が都から帰る途中の旅籠で、

ある女と懇ろになるが、朝になってみると老女であった。

驚いた僧は、逃れようとするが、女は巫女なので占いをし
てどこまでも追いかけて来る。やむを得ず、川に沈めて殺
し、自身は平泉寺に帰るが、白い大蛇が現われ、食われて
しまう。それ以来、白鬼女という川の名が起こった、とい
うものである。

若く美しい男性、異常な能力を持った好色な女性、白い
大蛇の出現、そして何よりも『白鬼女物語』という題名が
こうした伝承を踏まえていることは、明白に示しているが、
この地名由来譚だけでは『白鬼女物語』の成立を説明する
ことはできない。

その間隙を埋めるものの一つは、先学の指摘する『金驢
譚』であろう。⁽⁷⁾『白鬼女物語』において、主人公が物見高
い「予」であり、一人称独白体がとられていること、いわ
ゆる稠密体の文体で書かれていること、魔法の場面が描か
れること、これらは『金驢譚』の影響に帰すべきである。

だが、それでもなお、説明しつくせないものが残るだろ
う。そのうちのかんりの部分を埋めるのが、本稿で指摘し
た岩見武勇伝だと思われる。それは単に主人公の性格だけ
ではない。武者修行ものを思わせる主人公が、山中で大蛇
の化物に出会うとの構想を立てる時、鏡花は、青葉山での
重太郎の大蛇退治の話を意識していたであろう。

七、『高野聖』と岩見武勇伝

以上、『湯女の魂』が岩見武勇伝の一種のパロディとし
て成立していることから始め、講談における語りの手法を
取り入れていること、また、素材については、『蝙蝠物
語』『白鬼女物語』にも岩見武勇伝の影響を認めうるこ
とを指摘してきたが、では、『高野聖』についてはどうだ
ろうか。

まず、第一に考えられるのは、大蛇の出現する場面であ
る。むろん、これは白鬼女川地名由来譚との関わりもある
ので、単純にはいえない。主人公が若い僧であることも、
むしろ、白鬼女川地名由来譚を思わせるであろう。が、
『白鬼女物語』に岩見武勇伝の影響を見ることができると
すれば、『高野聖』にも影響があるとするのが自然だし、
何よりも、大蛇そのものの性格が『高野聖』では、岩見武
勇伝に近いのである。

というのは、白鬼女川地名由来譚では、大蛇は女の妄執、
もしくは怨念であったが、『高野聖』では、「山の霊」とし
て描かれているのである。岩見武勇伝の大蛇は青葉山の主
ともいふべきものだから、この点、岩見武勇伝の方が、
『高野聖』に近い。

次に、主人公宗朝の性格である。宗朝は諸国修業の若い

僧だが、自らが語るように、「川の水を飲むのさへ気が怯けたほど生命が大事」な「臆病者」である。これは恐いもの知らずの豪傑重太郎とは、ちょうど正反対の性格である。したがって、大蛇に出会った時も、重太郎のように鉄砲で退治するのではなく、「杖を棄てて膝を曲げ、じり／＼する地に両手をついて」「誠に済みませぬがお通しなすつて下さりませ」とひたすら頼み込むことで、切り抜ける。これなどは、岩見武勇伝をわざとひっくり返したものと考えられる。

さらに、夜中に孤家に魑魅魍魎が押し寄せる気配に宗朝が怯える場面。

むさ／＼びか知らぬがきツ／＼といつて屋の棟へ、魑て凡そ小山ほどあらうと気取られるのが胸を圧すほどに近いて来て、牛が鳴いた、遠くの彼方からひた／＼と小刻に駆けて来るのは、二本足に草鞋を穿いた獣と思はれた、いやさま／＼にむら／＼と家のぐるりを取り巻いたやうで、二十、三十のものの鼻息、羽音、中には囁いて居るのがある。恰も何よ、それ畜生道的地獄の絵を、月夜に映したやうな怪しの姿が板戸一重、魑魅魍魎といふのであらうか、ざわ／＼と木の葉が戦ぐ気色だった。

息を凝すと、納戸で、
(うむ)といつて長く呼吸を引いて一声、魔れたのは婦人ぢや。

魔物の気配があたり一面に立ち込め、寝ている女が魔される、というあたり、四節で引いた『湯女の魂』『岩見武勇伝』の場面そのものであらう。この後、女が「今夜はお客様があるよ。」と謎の言葉を口にする、家鳴りが起こり、豪傑ならぬ宗朝は、必死に陀羅尼を呪して魔物の退散を祈ることになる。

もっとも、『高野聖』の女は、『湯女の魂』や『岩見武勇伝』のように、魔物に取り憑かれて魔されているわけではない。それどころか女自体が魔物であつて、魑魅魍魎と思われたのは、女のために動物に変えられた哀れな男たちらしいのだが、それと分かるのは、親仁による種明かしが行なわれてからであつて、それまでは、孤家な女は、意味ありげな言葉を口にしたりするのだけれど、魔女としての正体は明かされず、ある意味では、『湯女の魂』や『岩見武勇伝』に登場する妖怪に取り憑かれた哀れな美女であるかのごとくに描かれているのである。

これは孤家の女が、そもそも好色な魔女と薄幸の美女という二面性を持った存在であることもさることながら、例

のパロディの手法が用いられていることによる。つまり、妖怪に取り憑かれていた美女の話を読むように見せながら、女に意味ありげな言葉を口にさせ、気を持たせておいて、実は、とやる、あの手法である。

八、『高野聖』と講談

前節では、『高野聖』と岩見武勇伝の関係について見てきたが、本節では、岩見武勇伝に限らず、『高野聖』における講談的な手法、すなわち、例の虚実をないまぜにしたパロディの手法について考察したい。

宗朝の話は、これから見て行くように、ところどころでお話をことさらにちらつかせているのだが、「私」の「諸国を行脚なすつた内のおもしろい談を」というおねだりに応えたものであつて、全体としては実体験として語られており、事実として受け取られることを狙っている。

最初に語られるお話は風穴伝説である。これは『三州奇談』を素材としたものと思われるが、ここでは当時ポピュラーであつた江の島へ抜けるという富士の人穴伝説を匂わせながら、聞き手たる「私」の気を引いている（ということは読者の気をも引く）と考えられる。その後、大蛇との出合いの場面で「丁度山の奥に風が渦巻いて其処から吹起る穴があいたやうに感じられる」といつておいて、期待さ

せながら、実は瀧の音だったというオチをつける。

ここで注意しなければならないのは、こうした既知のお話は、ちらつかせられることによって読者（聞き手）の興味を引きはするが、もしそのものが語られてしまうと、「何だ、そのお話なら知っているよ。実は作り話だったんだね。」ということになってしまうことである。だからこそ、鏡花は宗朝の話に既知のお話をちらつかせながら、作品の中には、容易にそのものを持ち込もうとはしない。これは、大蛇との出合いも同様である。

心持余程の大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈余、段々と草の動くのが広がつて、傍の溪へ一文字に颯と靡いた、果は峰も山も一斉に揺いだ

いくら何でも大き過ぎて、これでは岩見重太郎の大蛇になつてしまふところだが、この後すかさず「気が付くと山嵐よ。」と全山を揺るがす山嵐の中に幻視した大蛇であつたという心理的処理が施される。かくして、物語のリアリティは保たれるのである。¹⁰

次は、孤家の女の登場。

（何方、）と納戸の方でいつたのは女ぢやから、南無

三室、此の白い首には鱗が生えて、体は床を這つて尾をずる／＼引いて出ようと、又退つた。

もちろん、女の首に鱗など生えてはいない。あくまで宗朝の想像に過ぎない。もつとも、その後で、実は、と種明かしがされるのであるが。

また、女が自分が都の話を書いたがつても、決して話してはいけなさと禁ずる、例の場面も同様に考えられる。これは消えてしまった伏線であつて、そこにあつたかも知れない、もう一つの『高野聖』の女の姿を読み取ることもできるが、昔話によくあるこの伏線は、白癡の亭主にかいがいしく仕える女の優しさに宗朝が涙を流したときの言葉「私も嬢様のことは別にお尋ね申しませんから、貴女も何も問うては下さいますな。」によつて断ち切れ、女が驚になつたりすることもない。

先にあげた、夜中に孤家に魑魅魍魎が押し寄せる気配に宗朝が怯える場面も同じように考えることができよう。妖怪の気配は語られるのだが、妖怪そのものの出現を語ることは、注意深く避けられている。

このように、お話はちたつかされるけれども、なかなかそのものは語られないわけで、一種の心理的なシーソーゲームのような楽しさがあるのだが、その都度、作り話へ向

かう伏線は断ち切れ、物語全体としては、逆に、リアリティを持つことになる。かつて天生峠を越え、大蛇や山蛭の森に出会い、白癡と暮らす哀れな美女と出会い、孤家に宿つたという話は、宗朝の実体験として承認されることになる。

九、「私」の機能

以上、講談が『高野聖』に与えた影響について、素材、話づくりの技法の両面から見てきたわけだが、最後に、この作品が「私」が宗朝からお話を聞く体裁をとっていることの意味を考えてみたい。

『飛縁魔物語』は三人称客観描写であつたが、『白鬼女物語』は、「予」の独白、『蝙蝠物語』も同様で、怪異を体験した本人がその事件を報告する体裁であつた。これは周知のように、『金驢譚』に学んだもので、怪談にリアリティを与える効果を狙つたものと考えられる。これは、五節で見たように、『蝙蝠物語』が実際には岩見武勇伝を踏まえながらも、その出自を隠蔽するように書かれていたことと無関係ではあるまい。

ところが、『湯女の魂』では、講談ということもあつて、あからさまに演者が顔を出し、小宮山を視点人物にしながらも、自由自在にお話を語っている。この場合、虚実がな

いまぜになつてゐるにしても、妖怪そのものの出現が露骨に語られ、話そのものの信憑性は、かなり低い。せいぜい小宮山という男が小川温泉に行ったこと、篠田という男が小川温泉の湯女に惚れられ、その女が篠田を思いながら死んだ、というあたりまでである。というより、もともとそんなことは、ダシに過ぎないので、岩見重太郎などの既知のお話をちらつかせては、それを外して行くという、パロディの手法を用いて、語り手と聞き手の間で一種のゲームを楽しんでいるといつてもいい。

さて、『高野聖』であるが、この作品の語り手は誰かというところ「私」ということになる。『私』が旅先で旅僧から、面白い話を聞いたという体験談である。「私」の体験談そのものは、いかにもありそうだ。

では、宗朝の話はというと、前述したように、現実離れたお話をちらつかせながらも、その都度、その伏線は断ち切られたり、合理的な解釈が与えられ、妖怪そのものは容易に語られず、結果としてその信用度は高い。

「私」は、この作品の語り手であると同時に宗朝の物語の聞き手でもある。『高野聖』が「私」によつて再構築された入れ子式の物語であり、その入れ子のもつとも奥に位置する孤家の女の神秘性が高められているとし、「私」に巧妙な物語の再構成者の機能を見ようとする論があるが、

そのような「私」の語り手としての機能にのみ着目した見方はやや一面的ではなからうか。聞き手としての働きにも注目すべきであろう。

前述したように、宗朝の話は実際の体験として語られている。そのために、お話をちらつかせながらも、お話をそのものを容易に語ろうとはしないのである。ただし、一つだけそのタブーが侵されている。それが孤家の女の主体を告げる、例の「親仁」の話である。

「何と、おらが曳いて行つた馬を見さつたらう、それで、孤家へ来さつしやる山路で富山の反魂丹売に逢はしつたといふではないか、それ見さつせい、彼の助平野郎、疾うに馬になつて、それ馬市で錢になつて、お錢が、そうら此の鯉に化けた。大好物で晩飯の菜になさる、お嬢様を一体何ぢやと思はつしやるの。」

私は思はず遮つた。

「お上人？」

魔女としての孤家の女の正体が語られようとするや、「私」は、話を遮り、「お上人？」と問いかける。もちろん、これは「嘘でしょう?」「今までののは、みんなつくり話だったんですか?」というサインである。だからこそ、

「私」の疑問を飲み込んだことを「領己ながら呟いて」示し、「いや先づ聞かつしやい」と畳み掛けるように、話を継ぐのである。

「私」の疑問の表明にもかかわらず、ついに信じがたいような女の素性を明かす「親仁」の話は語られる。しかもその合間には、「親仁」の話に対する信頼を示すかのような宗朝のコメントが挟まれるのである。

と親仁が其時物語つて、御坊は、孤家の周囲で、猿を見たらう、墓を見たらう、蝙蝠を見たであらう、兎も蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生にされた輩！

あはれ其時那の女が、墓に絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸はれたのも、夜中に魑魅魍魎に魔はれたのも、思ひ出して、私は犇々と胸に当つた。

さらに、「親仁」の話を聞き終わつた後の宗朝自身は、次のように語られる。

藻抜けのやうに立つて居た、私が魂は身に戻つた、其方を拝むと斉しく、杖をかい込み、小笠を傾け、踵を返すと慌しく一散に駆け下りたが、

話を聞き終わるや、「親仁」に感謝し、逃げるように山を下りたその時の宗朝は、間違いなく「親仁」の話を信じていたはずである。

そして、そのことを語っている今の宗朝は、どう思っているかというところ、「高野聖は此のことについて、敢て別に註して教を与へしなかつた」というのである。これは、文字通りには、何も教訓を与えなかつたという意味に解されるが、広くは「親仁」の話について自身の評価を与えなかつたとの意味にも解釈できよう。というのは、何か教訓を与えるとなれば、それはそのまま「親仁」の話に対する何らかの評価につながるからである。

このように、宗朝は自ら口を開いて、「親仁」の話についての評価を与えることはなかつた。しかし、宗朝の実質的な評価は「私」によって作品の中に語られている。

高野聖は此のことについて、敢て別に註して教を与へはしなかつたが、翌朝袂を分つて、雪中山越にかゝるのを名残惜しく見送ると、ちら／＼と雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。

この雪の中を山越をしようと、坂道を上って行く修業僧

としての宗朝の姿は、何よりも、宗朝が「お若い、屹と修業をさつしやりませ。」という「親仁」の言葉の実践であり、その話をそのままに信じ続けていることを明白に示している。だからこそ、その姿が「私」に「恰も雲に駕して行くやうに」思わせるのである。

ここに宗朝の「親仁」の話に対する、そして、「私」の宗朝に対する評価を読み取ることができよう。宗朝がこうして修業を続けているのは、何十年も前に「親仁」の語った摩訶不思議な物語を信じていればこそで、そこに「私」は畏敬の念を抱いたということになる。

こうして見てくると、「私」の機能の別の面が見えてくる。それは、入れ子を作ることによって、幻想性を高めるとか、巧みに話を再構成して語って聞かせるといったものではない。それは、第一に、読者を講談のごとき語り手と聞き手の間が親密な語りの場に誘う機能である。「私」は宗朝の話の聞き手として心理的なシーソーゲームに参加すると同時に、読者をもそのゲームの中に誘い込む。「私」が宗朝の話に乗って、虚と実の間を行き来すると共に、読者も揺れ動かされるのである。そして、第二に、「私」は語りの場における聞き手として、読者の代行機能を持っている。つまり、お話が語られようとするや、当然、われわれ読者は疑問を感じるわけだが、そうすると、すかさず

「私」は、読者に代わり、宗朝に質問をしてくれるのである。だからこそ、お話が匂わされてからも、興味を失わずに物語を読み進めることができるのだ。第三には、宗朝に対する最終的な評価を固定し、読者に示す機能である。初め「一見、僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よりも寧ろ俗歟」と思われた宗朝を、「親仁」の話を信じて、今も修業を続ける聖として固定する働きである。

むすび

こうしてみると、この作品は非常に手の込んだものであることが分かるだろう。初め『飛縁魔物語』で魔性の女を描こうとした鏡花は、通常の三人称客観描写では、リアリティが不足であると感じ、『白鬼女物語』『蝙蝠物語』では、一人称独白体を用いて、語り手の実体験であるがごとき体裁を取ろうとした。しかしながら、それでもなおかつ、異常な物語の内容にリアリティを与えることはできなかったし、しかも、下敷きとしている話が少しでも透けて見えたが最後、全くの作り話に落ちてしまう欠点を持っていた。そうした折、かねて興味を持っていた講談の手法を活かして、自ら創作した怪談が『湯女の魂』であった。この中で、お話をちらつかせながら新しい話を紡ぎ出すパロディの手法の面白さを認識したのであろうし、虚実をないまぜにして

語る講談の手法は、虚を交えて語ることで、逆に、実である部分を読者に推測させる働きを持つていることにも気付いたであろう。けれども、講談は演者が第三者の話を語るのが普通である。それでは、どうしてもリアリティが欠如してしまう。かといって、自身の体験談として、怪談を講談調で語ったとして、その内容があまりにも非現実的である場合には、やはり、信用度が低くなってしまう。そこで、工夫されたのが、一つには、心理的な処理であり、最後に、孤家の女の素性を明かすにあたっては、「親仁」の話として入れ子の中に組み込むことであつた。ところが、そのような又聞きの体裁を取ると、どうしてもリアリティが不足してしまう。そこで、さらに、設定されたのが「私」という聞き手であり、語り手であつたのではないか。

「私」は、宗朝の話がリアリティを失おうとするや否や、割って入る。そして、孤家の女の素性がすべて語られると、「親仁」の話を信じて、修業を続ける宗朝の姿を畏敬の念を持つて写し出す。その姿の中に、幻想世界を現実として固定しているのが「私」なのである。

むしろ、「私」が「親仁」の話を信じて修業を続ける宗朝に崇高さを感じているのは、人を信じることの大切さとかいった道徳的な理由ではあるまい。不可思議の世界を信ずることへの「私」の憧れであり、共感であつただろう。

これは、鏡花の憧れ・共感であつたといつてもよい。そのような世界が合理的世界観によつて、滅び行きつつあつた時代にあつて、さまざまな工夫を凝らして幻想世界にリアリティを与え、守り抜こうとした作品であるといふことができる。当然、そこには、そのような時代に対する鏡花の批判を見ることが出来るわけで、「天生峠」はいわば鏡花のファンタジーエンであり、「高野聖」は鏡花のネバー・エンディング・ストーリーなのである。

『高野聖』によつて、自己の幻想世界を確立した鏡花は、その後、『女仙前記』『きぬぎぬ川』など幻想世界を舞台とした作品を生み出して行く。

注

(1) 鈴木啓子「泉鏡花『高野聖』論——その語りをめぐつて——」(『お茶の水大学人文科学紀要』四二、平成元年三月)。ただし、坂井 健「『高野聖』の語り——『白鬼女物語』『蝦蟇法師』の素材論を通して——」(『批評研究論集』二、現代文芸理論研究会、一九九四・七)では、多少触れた。

(2) 坂井 健「泉鏡花『蝙蝠物語』とその問題点——新資料『新文壇』六号から——」(『日本近代文学』昭和六三年一〇月)、また、須田千里「鏡花における「魔」的美女の形成と展開——『高野聖』——を中心に——」(『国語国文』平成二年一月)は私見と肯定的に論じている。

(3) 両作品の違いについては、坂井 健「『蝙蝠物語』から『湯

女の魂』へ」(『日本文学』一九九二年六月)を参照されたい。

- (4) 坂井 健 「鏡花における『絵本百物語』受容の可能性——『高野聖』孤家の女の原像を中心に——」(『イミタチオ』二三号、一九九四年五月)

- (5) 藤沢秀幸 「『高野聖』——孤家の女をめぐる——」(『国文学解釈と鑑賞』特集泉鏡花、一九八九年二月)、および、注2の須田論文参照。

- (6) 注1の坂井論文参照。

- (7) 注5に同じ。

- (8) 坂井 健 「『高野聖』の世界——「風穴」を中心に——」(『稿本近代文学』一八集、一九九三年一月)

- (9) 坂井 健 「『蝙蝠物語』成立考」(『稿本近代文学』一九集、一九九四年一月)

- (10) 注1の坂井論文参照。

- (11) 注3に同じ。

- (12) 赤間亜生 「『高野聖』論——「沈黙」の物語——」(『日本近代文学』四八号、一九九三年五月) は、「私」から「宗朝」へ、「宗朝」から「親仁」へと謎が持ち越され、当事者である女は口をつぐんでおり、語られぬゆえにこそ、孤家の女は魅力的たりうるとして、巧妙に宗朝の話を再構築しているのが「私」であるとする。

(付記) 本稿は、第三回泉鏡花研究会(一九九四・一三・三、於大正大学)における発表「『湯女の魂』と講談——『蝙蝠物語』『高野聖』の成立——」をもとに全面的に書き改めたものです。

